



思齊のしせい

大阪府立思齊支援学校 支援室だより

第50号

令和3年11月9日

前号に引き続き、今号も愛着障害についてのお話です。今号の担当は中学部の橋爪です。愛着障害のこどもの支援を考える上で、「愛情の器モデル」という考え方があります。先生方が実際に支援を考えていく際のヒントになればと思います。

「愛情の器」モデルとは？

愛着障害、愛着の問題を抱えるこどもに対して適切な支援をしていくことで、愛着修復につなげたいと思ったとき、支援として、ただこどもに働きかけるだけでは不十分です。その支援の根底にある考え方として「愛情の器」モデルというものがあります。例えば、「もっと構ってほしい!」「もっと〇〇してほしい!」と要求がエスカレートしていく愛情欲求エスカレート現象も、「愛情の器」モデルによって説明することができます。

【a.底が抜けていて愛情が貯まらないタイプ】

愛情を感じる器はできかけているため、愛情を感じることはできますが、底に穴が開いているため、もらった愛情を貯めておくことができません。そのため、愛情に慣れてしまう現象のみが起き、前回の愛情と同じものでは満足できず、「もっと欲しい!」となってしまいます。



【b.器がなくて愛情が貯まらないタイプ】

愛情を入れる器ができていない状態のため、人間不信で、人に近寄ろうとしません。抑制タイプ・反応性愛着障害を表しています。嬉しさや楽しさの表現が少なく、辛いときにも素直に甘えることができないのです。



【c.愛情を受け取る口が小さく閉じるタイプ】

自閉障害と愛着障害を併せ持つタイプを表しています。自閉障害があると、認知の障害のため、自分のこだわりの世界を大事にします。愛着対象を意識して愛情を受け取るという対人関係が苦手なため、愛情を受け取る口が小さくなってしまいます。



【d.安定的な器があるタイプ】

以前もらった愛情を貯めておくことが可能で、貯めてある愛情と今もらった愛情が合わさって、どんな場合でも愛情を確かに感じる事ができるのです。



「愛情の器」モデルは、支援する側が「これをした」「支援した」だけで満足するのではなく、その支援がこどもにどのように伝わり、どのように受け止められ、どう貯めておかれたかを確認することの重要性を指摘しています。つまり、支援は「何をしたか」ではなく、「どう受け止められたか」で評価されるべきなのです。受け止められていないな…と感じたら、かかわり方をそのこどもに合うように変えていかななくてはなりません。

参考文献：米澤好史『やさしくわかる！愛着障害』ほんの森出版,2018.



愛着障害のこどもの支援を考える際には、こどもがどのタイプであるか考えることで有効な支援につながっていくかもしれませんね!!

